８．研修生のページ

BTC 育成調教技術者養成研修が昨年 4 月に開講されて早くも半年以上経ちました。今回は研修の様子や感想について研修生に述べていただきましたので紹介します。

「志高く」

育成調教技術者養成研修　第 29 期生　**松原　和臣**

一流のホースマンになりたいという想いを強く抱き、第 29 期の研修生は日々を送っています。入講当初に抱いた目標、将来の夢が、果たして本当に叶えられるのかと不安になり思い悩んだこともあるでしょう。本当に自分は成長しているのか、馬に携わっていけるのかと悩み、研修が辛くなり辞めたいと思った日もあったでしょう。しかし、第 29 期生の全 21 名は 1 人も脱落することなく半年を終えました。

「練習しているのか、お前！努力しろ、努力！！」

騎乗訓練が始まって間もない 4 月下旬、まともに手綱の持ち替えができない私に、教官はそう言いました。私を含め多数の研修生は乗馬未経験者であり、当然ながら馬に乗り、操作する技術など持ち合わせておらず、知識・技術ともに非常に未熟な者が多かったのです。そのような乗馬未経験者は努力するほかありません。この研修所では、上手くなろうと心に誓ったのであれば、それを後押ししてくれる最高の環境が揃っています。騎乗技術を磨きたいのであれば、寮に設置されているシミュレーター（木馬）でひたすら練習することもでき、知識を得たいと思ったのであれば、本を借りて自ら学習することもできます。騎乗について疑問に感じたことを教官に尋ねれば、的確な助言と、実践して個別に指導していただけることもあります。普段は主に覆馬場、角馬場、1 周 800m の教育用走路で訓練を行なっていますが、軽種馬育成調教場（BTC 調教場）も利用できます。今までに 800m トラック、1,600m トラック、ダート 1,600m 直線馬場、グラス坂路馬場、屋内坂路馬場および屋内直線馬場を利用させていただき、非常に充実した訓練を行なってきました。このような素晴らしい環境のもとで、我々研修生は一流のホースマンを目指し、日々闘志を燃やして訓練に臨んでいます。

訓練に対して一生懸命に取り組んではいるものの、完璧な騎乗が出来た日など無いに等しいでしょう。落馬、暴走、斜行、これらはほとんどの研修生が経験してきました。失敗し、教官に叱責されれば気分は沈み、立ち止まりたくなるかもしれません。しかし、失敗こそが成長への近道であると私は考えています。なぜあの状況で馬を抑えられなかったのか、なぜ馬がヨレてしまったのか。自分自身でより良い騎乗を常に探し求める姿勢を持って突き詰めていけば、次回の騎乗訓練に向けての反省点が明確に浮かび上がります。ただし、反省点を見つけだしたとしても、その場だけで反省するようでは意味がありません。大事なことは、その失敗を繰り返さないように「意識」することであり、訓練中、何も考えずに騎乗するだけでは、同じ失敗を繰り返し、成長する度合いはより小さいものとなってしまうでしょう。

光陰矢の如し。気が付けばもう半年もの月日が流れ、走路での併走の訓練も当たり前にこなせる

ほどにまで成長しました。おそらく残りの月日もあっという間に流れ、長いようで短かった研修生活に別れを告げ、皆それぞれの道を歩んでいくでしょう。研修生活を送っていく上で同期の存在は大きく、大切な仲間です。しかし、彼らはライバルでもあります。お互い切磋琢磨しつつ、ここまできました。この研修生活を終えたとしても、そこがゴール地点ではありません。一流のホースマンへ向けての第一歩。むしろスタート地点と言えるかもしれません。あと半年、さあ頑張ろう第 29 期生。それぞれが抱く夢へ向けて一歩一歩突き進んでいこう。一流のホースマンになると胸に誓って、志高く。

「馬のある生活」

第 29 期生　内野　愛美

今では当たり前となったこの日常も、入講当初を思い返せば、朝起きることも、馬に触ることや厩舎作業を行うことでさえも、苦悩の日々でした。そんな日々でしたが、馬のある生活は、私達に様々な成長をもたらしました。騎乗技術はもちろんのことですが、毎日他人との共同生活によって得られる社会性やモラル、マナーなども自然と身につきました。他にも専門の講師の下で、馬の取り扱い方や、馬の健康・蹄のことなど、ホースマンとして必修である事柄も学んできました。私達は、ただ机上で知識のみを学ぶのではなく、学んだことを実馬で実践し、その学んだ知識を定着させることにより、実際の現場でも活かすことが出来るよう、積極的に、かつ意欲的に学習しています。この研修所以外でも、様々な牧場で実習や見学をさせていただき、卒業後の進路に向け、少しずつ実践も積んできました。

10 月に入り、私達は JRA 育成馬の馴致に参加させていただき、若馬の馴致について学んでいます。今までは、大人しく馴らされた教育馬ばかりを取り扱ってきたため、いつ暴れるかわからない状況の若馬となると、研修生の中でも空気が一変し、全員に緊張感が走っています。右も左もわからない若馬を少しずつ競走馬に成長させていくことに、新鮮さと充実感、時には親心を感じつつ、サラブレッドの成長に携わることの喜びをかみしめながら毎日を過ごしています。この経験は、実際に現場で馴致を行う場合のみならず、馬を調教する時にも、必ず役に立つと考えています。

私自身はというと、この半年で「当たり前のことを当たり前に行う」ということの重要性に改めて気づけたことが、最大の成長と言えます。「当たり前のこと」というのは、１人１人レベルの違ったものであり、例えば当たり前のように挨拶が出来る人もいれば、出来ない人もいます。当たり前のレベルをどのレベルまで引き上げるのかはそれぞれですが、私は少しでも多くの技術を当たり前のようにこなし、向上心を持ち、常に新しいことにチャレンジしていきたいと思います。そして、その新しいことも当たり前にこなせるようになり、さらに次なるステップにチャレンジし、今は未熟ながらも、少しずつ自分自身を成長させていきたいと考えています。これは、騎乗技術から厩舎作業、私生活に至るまで、人間の行動全てにおいて言えることです。これからの人生においても、当たり前に出来ることを少しずつ増やしていき、人間として常にチャレンジし、常に成長していくことのできる、そのような人間を目指していきたいのです。

私たちは、１人１人が技術の向上に努め、残りの半年間の研修にも積極的に、かつ懸命に取り組

みたいと思っています。１年間の研修を終えた頃には立派なホースマンになり、競馬産業を盛り上げられるよう精進していきたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

『“表現力”という能力」

軽種馬育成調教センター　養成担当者　**髙垣　俊哉**

４月から始まった研修も約半分が経過し、研修生達も除々にホースマンとしての自覚が芽生えてきたように見受けられます。下半期では、JRA 日高育成牧場における育成馬の馴致実習並びに騎乗実習、各専門分野に精通した講師による馬学などのカリキュラムが組まれています。残り僅かな期間ですが、今春４月の就労に向けて後悔のないよう日々の研修を受けてもらいたいと思います。

現在、彼らは騎乗訓練を開始して半年弱が経過しましたが、騎乗経験者がほとんど居なかったことを考慮すれば、現段階においては十分に評価できるレベルにあると思われます。しかし、不安な点もあります。それは彼らの半数近くは客観的に見て、「あまりハングリーではない」ということです。これは研修の様々な面で感じられることなのですが、何を言っても「反応が薄い」ということも例えの１つです。向こうから来ないということであれば、当然こちらから仕掛けていくわけですが、それでもあまり返ってこない。頭の中で何を考えているのかが見えてこないといった感じです。こんなことを言うと「そんなやる気のない奴は駄目だ」と言われてしまいそうですが、やる気がないという訳ではありません。どういうことかと言うと、私達養成担当者は、月に一度、個人面談という形で彼らとコミュニケーションを図る機会を設けており、その際、一見ハングリー精神の無いように見えていた生徒も、実はそうではなかったことに気付かされるのです。つまり、彼らはそのような気持ちを内側に秘めてはいるものの、それをあまり表現していないだけなのです。表現の仕方を知らないのか、それとも必要がないと思っているのかはわかりませんが、恐らくその両方なのではないかと私は感じています。

こういたったタイプの研修生は、近年、特に若年層を中心に増えてきているように感じますし、牧場関係者の方々からも同じような悩みを聞くことがあります。私も始めはこのような研修生に対してどのように接したらいいのか解らなかったというのが正直なところでした。「如何にやる気を見せるか」ということばかり考えて（笑）馬を学んできた私の感覚ではどうも理解できなかったからです。しかし、彼らと十分なコミュニケーションを取りながら、長い目で指導を続けていくことで大半の問題は解決できるものです。特に自らをあまり表現しない生徒に対しては、そういった中で互いの信頼関係を築くことが大変重要であり、そこに指導のヒントが隠されているように思います。

それでも、彼らは順調に成長しています。そして今年の春には卒業していくでしょう。ただ、私はそれで本当にいいのかなぁと思います。なぜなら、仕事をする上で自身の強い気持ちを表現する、やる気を見せるというのはどんな時代においても大切なことのように思うからです。そして、そのような者の行動や発言は、周囲の心を揺さぶり、評価を得て、チャンスを引きよせる力を持つものです。しかし、そのような気持ちを自身の心に内在させているだけでは、掴めるはずのチャンスをみすみす逃してしまわないかと思うのです。そういった意味で、私は彼らの将来に少なからずの不

安を抱き、彼らに「表現力」という能力を身に付けさせること、これが指導者としての今後の課題であると考えています。